

大学入試センター試験および国公立大二次・私大

大学入試 分析と対策

英語

2015

平成27年度

学校法人 河合塾
英語科講師 江本 祐一

启林館

この冊子の内容は次のURLからもアクセスできます
<http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/tea/kou/eigo>

1. センター試験

(1) 筆記試験

2015 年度の筆記試験は、2014 年度の追試の出題を踏襲したものとなっており、本試ベースで考えれば、近年まれに見る大きな出題形式の変更があった。2014 年度の追試に目を通していなかった受験生は、出題形式が大きく変わっていたために、若干の動搖があったかもしれない。具体的には、従来第 2 問 C で出題されていた語句整序問題が第 2 問 B で出題され、第 2 問 C には、新傾向の問題として 3 つのブロックに分かれた語句をつないで対話の応答文を作る問題が出題された。従来型の語句整序問題同様に、1 問 4 点の配点である。また、従来第 2 問 B で出題されていた対話文完成問題が第 3 問 A で出題され、小問数は 3 問から 2 問に減った（1 問あたりの配点は 4 点で変更なし）。従来の第 3 問 A の語句の意味推測問題は、独立した問題としての出題はなくなり、第 5 問と第 6 問の小問として 1 題ずつ出題された（ちなみに、第 5 問で問われた have a penchant for は 2010 年度の第 3 問 A で出題済みの表現）。また、第 5 問がイラストを用いた問題ではなくなった。もっとも、同一の事柄について 2 人が別々に考えを述べた英文が出題されているという点では変わりがない。そして、先に述べたことと重複するが、第 5 問、第 6 問に語句の意味推測問題が出題された。従来の第 3 問 A の出題の際には、この意味類推問題は 4 点の問題であったが、第 5 問・第 6 問の小問となったために、6 点の問題となった。

総語数は、2014 年度の 4,187 語に対して 4,385 語で、約 200 語増加している。出題形式の変化と語数の増加が主な原因だろうか、平均点は 2014 年度の 118.87 点から若干下がって 116.17 点となっている。

配点については、先に触れた部分以外には 2014 年度からの変更はなく、音声に関する問題の配点が 14 点、文法・語法系の問題の配点が 44 点、残りの 142 点が読解系の問題で、読解力重視の傾向に変化はない。

第 1 問

2014 年度同様に、A が発音問題（母音 2 問・子音 1 問）、B が音節分けのないアクセント問題（2 音節・3 音節・4 音節・4 音節）で、A・B ともほかの 3 つと異なるものを選ぶ問題。2014 年度の equipment のように正しく音節分けすること自体が難しい単語の出題はなかったが、B 問 3 の consequence / discipline / residence /

sufficient のアクセントを問う問題は特に正答率が低い。音節数の多い、つまり長い単語のアクセントが定着していないことがうかがわれる。また、handle / handsome / hook / mission / success / ambition / residence など、いわゆるカタカナ語が多く出題されているのも例年と同じ（発音問題では flood / hook / shook / wooden というカタカナ語を含む A 問 2 の正答率が最も低い）。これらのカタカナ語も含めて、日頃から正しい発音、アクセントを心がけておくことが必要。

第 2 問

従来、第 2 問 B に出題されていた対話文完成の問題が第 3 問 A に移動し、新たに応答文完成の問題が第 2 問 C で出題されたことにより、第 2 問全体は文法・語法に関する知識を問う問題となった。

A では、2014 年度に出題された 2 か所の空所補充の問題が、2015 年度も同様に 3 問出題されている。語彙にせよ、文法や語法にせよ、斬新な問題が出題される印象の第 2 問 A であるが、旧課程最後の年となる 2015 年度は、普通の文法問題という印象が強く、例年と比べて異質な感じを受けた。問 2 は have O done の表現を問うもの。問 8 の What did you say the best solution was? では正確な構造の文を作る能力が問われている。また、問 9 では、一般には避けたほうがよいとされている非常に格式ばった表現 so powerful a tool that ... が問われている（ただし so good a cook の形で 1997 年に出題歴あり）。さらに、問 10 では next season という副詞句に the をつけるかどうか、といった細かい判断が問われるなど、近年まれに見るほどに、正確さやフォーマルさに関して細かな問い合わせとなっている。「少しくらい間違っていても、通じればよい」という昨今の風潮に対して異を唱えるような出題内容である。全体の出来はあまり芳しくない。特に正答率の低かった 3 題を取り上げる。

第 2 問 A 問 1

Did you make your grandfather angry again?

You should [8] that.

- ① know better than ② know less than
- ③ make do with ④ make up with

第 2 問 A 問 3

Last winter was rather unusual [10] that very little snow fell in northern Japan.

- ① about ② by ③ in ④ on

第2問A 問7

Mt. Fuji stands impressively [14] the blue sky.

- ① against ② among ③ behind ④ by

いずれも知識を問う問題で、問7の正答率が最も低い。問3のin that SV...は、〈前置詞+that節〉という形になると、前置詞は省略される、という原則の例外的な項目で、予備校等の授業では必ず扱う項目。高卒生だけの正答率は7割を超える。問7は基本的な前置詞の用法を問う問題だが、全体の正答率は2割にも満たず、知識不足がはっきりとうかがえる。

Bの語句整序問題は、2014年度に統いて、3問とも6つの選択肢で対話文形式の出題。対話の発話者の名前が入っている点も含めて、出題形式は昨年度と同様である。出題内容は、仮定法過去完了, for sure, 受動態、同格のof, 接続詞による2つの節の接続、進行形, too ... to do, start doingなど、文法・語法の知識を問う出題となっている。興味深い弱点を示唆してくれる問1を取り上げる。

第2問B 問1

Yuki: Have we met before? You look very familiar to me.

Anne: I don't think so. If we had met, [18]
[19] sure!

- ① for ② have ③ I ④ recognized
⑤ would ⑥ you

[18]・[19]のセットでの正答率は6割程度であるが、[18]単独では9割を超える受験生が正しく⑤をマークしている。[19]で最も多いマークは①で、I would have recognized you for sureとすべきところを、I would have recognized for youとしたことが正答率の低さの原因であると考えられる。突き詰めれば、recognizeの語法に関する知識不足ということになる。ストレートにrecognizeの語法を問う問題として第2問Aで出題されていたとすれば2点の減点で済むが、第2問Bでの出題であるために、4点の減点になっている。

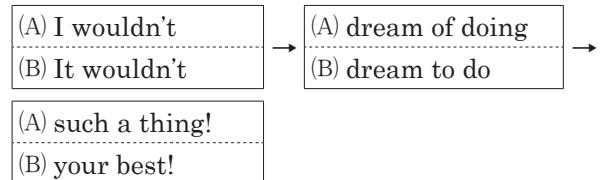
Cで出題された応答文完成問題は2014年度の追試に出題された問題で、本試では初めての出題。対話文の内容と文法的な構造を考える必要がある。従来、第2問Cで出題されていた対話文完成問題が、3問から2問

に減ったことを埋め合わせるような、対話重視のイメージの問題ではあるが、2015年度の出題を見る限り、文法的な知識を問う性質が強く、正確な表現の知識を正面から問う問題である。たとえば問2の解答はThanks to John driving me here, I'm in time.であるが、実際の会話でこのような「書き言葉」が用いられるのかどうか疑わしい。その意味でも文法力を問う出題であるといえる。ここでは問3を取り上げる。

第2問C 問3

Sophie: Look at those beautiful butterflies! Let's try to catch one to take home.

Hideki: No way! [26] Just enjoy watching them!



正答率は3割前後。正答は(A)→(A)→(A)だが、誤答が多いのは、(A)→(B)→(A), (B)→(A)→(A)で、いずれも2割を超える受験生がマークしている。前者ではdream to doという語法上のミスを犯し、後者ではdream of doingは正しく選択できているものの、dreamの主語をItにする、というミスを犯している。ここでも語法の知識不足が明らかである。

第3問

移動した対話文完成問題は出題数が2間に減っただけでなく、従来の対話の流れから答える問題から、知識重視の出題に変わったと言えるであろう。具体的には、Aの問1ではThat reminds me.という定型表現を含んだ選択肢が正解となり、問2では多義語lesson（ここでは「教訓」の意味）の知識が問われている。

Bの不要文選択問題は、2014年度は選択肢となっている文が連続していないものもあったが、2015年度は①～④がすべて連続している、という点を除けば2014年度と同様の出題内容。問3では、選択肢の英文が始まる直前の1文に含まれているも、most Japanese TV shows started and ended exactly on the hourの意味を正しく理解しなければ、これに続く①～④の英文はそれなりにすべてがつながっているように見えてしまう。3問中ではこの問題の正答率が最も低く、4つの選択肢のマーク率はほぼ均等であった。

Cの発言の主旨選択問題では、日本のある大学での「迷信」をテーマにした公開講座でのやりとりの一部からの出題で、第6問同様に、パラグラフ単位の内容一致問題と考えることができる。Moderator を除く3人のやりとりから2人のやりとりとなったことを除けば、従来通りの出題。32の正答率は、この問題だけでなく、第3問以降の読解系の問題の中で最も低い正答率となっている。紙面の都合上、一部省略して問題文を掲載する。

第3問C 32

Joseph: ~前略~ Believing in superstitions is one of the ways humans can make sense of a set of unusual events which cause someone to feel lucky or unlucky. This seems to have been true throughout history, regardless of race or cultural background.

Moderator: So, it is your view that 32.

- ① superstitions are rationally based on certain dates and numbers
- ② superstitions can be used to explain strange happenings around us
- ③ superstitious people believe race and culture are related to luck
- ④ superstitious people tend to have identical beliefs regarding history

くパラグラフのテーマを答える問題も引き続き出題された。もっとも、2015年度は再現データ（受験生および高校の先生等対象に、受験生がどの問題にどのマークをしたかを調整したもの）によると8割を超える正答率となっている。おそらくこれも問題文を最後まで読ませようという趣旨であろう（2014年度は最終パラグラフの第1文から、2015年度は最終パラグラフの最終文から解答が決まる）。ここでも、パラグラフの内容上の結びつきを意識した読解を行うことが求められている。

Bでは、2014年度に続いてウェブサイトを用いた問題が出題された。簡単な計算が必要とされる問題が出題されている点も従来通りであるが、特に問2、問3で問題文が従来にない長い文になっている。

第5問

これまで変わることなく出題されてきたイラストを選ぶ問題の出題が消えたこと、英文中に下線が引かれ、従来第3問Aで出題されていた意味の推測問題が出題されたこと、という点では2014年度と異なる出題内容。逆に、2つの英文に関する内容一致が出題の中心であること、2人の間での考え方の相違を問う問題が出題されている、という点に変化はない。もっとも、「娘の日本の中学への適応」という同一テーマに関する2つのメールではあるが、同一の出来事について2つの異なる立場からの記述ではなく、メールとその返信メールという点でも、従来とは異なる形態となっている。2014年度は過去最高の845語の長さであったのに対して、2015年度は854語で、わずかではあるが、さらに長文化が進んでいる。

設問内容については、問1はJeffのメールの第2パラグラフの最終文This is very different from how she was in the US.から考えて、AnnaのChicagoでの様子を答える問題で、従来に類例のない出題。第5問全体の正答率は8割程度であるが、この問1は7割で最も低い。また問5のNOT one of ...?のように、本文の内容に一致しないものを問う問題は2011年度の第6問で出題歴はあるものの、これも出題の仕方としては珍しいものである。

誤りの選択肢で最も選択率の高かったのは④であった。Josephの発言の最終文に含まれるThisの指示内容を1つ前の文に求めることで正解が決まるが、Josephの発言の最終文にストレートに反応し、まったく文意が異なるにもかかわらず、用いられている単語の重複がみられる④を選んだようである。センター試験の読解系問題で最も正答率の下がる選択肢の作りがこの問題から確認できるであろう。

第4問

Aでは「SNSのリスク」を論じた英文と2つのグラフを用いた問題が出題された。問題文の出典が示されているのは2014年度に続いていることである。グラフ中の項目を埋める問題、メッセージ全体のテーマなどの従来通りの出題に加え、2014年度に初めて出題され、正答率が2割程度と非常に低かった最終パラグラフに続

第6問

「科学調査への市民参加」について論じた論説文からの出題。語句の意味類推問題が1問加わったために、Aの設問から内容一致問題は1問減ったこと、2014年度には出題のなかったパラグラフの対応が示されない問

題として, the author's main message を問う問題が出題されたこと, B の Content に関する記述に, Introduction: Author's personal examples, Evidence: Successful volunteer efforts, Conclusion: Author's hope for the future など, パラグラフ単独の内容だけでなく, パラグラフの展開を意識して解答することが求められているという点が 2014 年度からの変更点。総語数は 2014 年度の 893 語から 854 語へと, わずかながら減少している。ここでも, パラグラフの内容上の結びつきを意識した読解を心がけることが求められている。全体の正答率は 7 割を超えており, 問 2 の語句の意味推測問題と, 問 4 のパラグラフ(6)での筆者の個人的見解を問う問題の正答率が 5 割程度。これは, 第 3 問 C の問 1 と同様に, 本文の内容を正しく理解した上で, 正しく述べられた記述を選ぶことが求められる問題である。

1 つのパラグラフ内で文と文のつながりを考えながら読み進め (第 3 問 B), 1 つパラグラフが終わるごとにその内容を確認し (第 3 問 C), 次のパラグラフの内容をある程度まで予測し (第 3 問 A の問 4), さらには 1 つのメッセージ内ではパラグラフとパラグラフのつながりを考えながら読み進める (第 6 問 B), といふ、いわば当たり前の読み方が求められており、またそうすることで高得点が得られるという点が、センター試験の読解問題の特徴である。このような読み方をすることで、文章全体の文意がとれるため、細部に対する理解も深まり、未知の表現が出てきても、立ち往生することなく読み進めることができる (第 5 問の問 2・第 6 問 A の問 2), というのが理想の姿であろう。

例年、本稿で指摘している通り、読解力の強化には、文法的知識と語彙力を高めるとともに、論説文をはじめ、エッセイや物語文を含めて、様々なタイプの英文を読むことが必要である。その際にはよくわからない部分があっても、少なくとも 1 つのパラグラフは最後まで読み切り、全体の内容を把握する訓練が効果的であろう。そのためには、比較的やさしめの入試問題でパラグラフごとに内容一致問題がついたものなどを利用することが考えられる。また、読解系の授業の予習の際は、あらかじめ生徒に制限時間を告げておき、まずは辞書なしで英文を読んで設間に答えさせる練習、つまり「予習は模擬試験だ」という姿勢での練習も効果的であろう。私自身の場合、生徒には、「予習段階で辞書を使う際は調べたい単語の半分だけを調べ、調べ

た単語は絶対にその場で覚えること。残りは文脈から推測すること」という指導をしている。外国語である以上、未知の単語があるのは当然のこと、それにいかに対応するかという訓練をさせるという意図であるが、語句の意味推測問題では、直接役に立つはずである。また、一度読んだ英文を繰り返し読む、という訓練を嫌がる生徒もいるが、既習の英文を繰り返し読むことで、読解のスピードが上がるとともに、語彙力の定着にも効果的である。その意味で、授業で扱われた英文や自分が問題集などで読んだ英文は繰り返し読むように指導すべきであろう。これらはセンター試験に限らず、国公立大の二次試験や私立大の試験対策にも有益なはずであるし、たとえ入試で英語が必要なのはセンター試験だけ、というような生徒でも、総合的な力が高まるのではないだろうか。

(2) リスニング試験

出題形式、出題内容、マーク数・配点のいずれも、例年通りの出題。読み上げられた語数は、2014 年度は 1,139 語に対し 1,123 語となり、やや減っている。設問と選択肢の語数は、2014 年度の 503 語に対して 462 語で、これも減っている。特に、第 4 問 A の選択肢がセンテンスではなくフレーズになったことで、選択肢を読む負担が軽減され、その分聞き取りに集中することができたと思われる。平均点は 2014 年度の 33.16 点に対して 35.39 点で、2006 年のリスニング導入初年度以来、久しぶりに 7 割を超えた。2014 年度までとほぼ同様の出題形式で、過去問演習を中心に練習を積んできた受験生にとっては、取り組みやすい問題だった。

正答率が低めの問題としては、第 3 問の問 16 が挙げられる。もっとも、現役生で 5 割強、高卒生では 7 割近い受験生が正解を選んでいるので、決して正答率が低い問題とは言えないが、現役生の再現データの中では最も正答率が低かったのがこの問題である。ただし、これはリスニング力というよりは、正解の a lost and found 「遺失物預かり所」という表現を知らなかったことが、誤りの原因であろう。

例年、本稿で指摘している通り、リスニング試験では、落ち着いて最後まで聞く姿勢が必要で、平常心で試験に臨めるレベルにまで聞き取りの力を高めておかなければならぬ。対策としては、①文字を見ないで繰り返し聞き、かなりの部分が聞き取れるようになるまで文字を見ない。②問題に答える。③文字を見て、

聞き取った内容を確かめる。④書き取る、という一連の練習を積むのが望ましい。①でいう「かなりの部分が聞き取れるようになるまで」というのは、個人的には「9割方聞き取れるようになるまで」と考えている。やはり未知の単語や表現は聞き取ることができないであろうから、そのようなものを除いた部分すべてが聞き取れるまで、ということである。また、④の書き取りまではセンター試験では必要ないという意見もあるだろうが、書き取ることによって、聞き取りに対する自信が深まること、語彙力や文法力の向上（聞き取れなかった部分を文法の知識で修復する）や、正しい綴りの定着につながるなど、その効果は大きいと思う。

選択肢の英文をあらかじめ読んでおくことなど、リスニング試験では読解力が影響を及ぼす要素も大きい。2015年度は、選択肢の英文量が減り、聞き取りに集中することができたために、平均点は上がっている。しかし、そもそも読み上げられた速度で英語を理解できなければ、対話に続く表現を決める事もできないし、聞き取った英語が言い換えられた選択肢が正解となる問題には対応できない。正しく速く読むということは、リスニング問題で高得点を取るためにも必要である。そのためには、筆記試験のところで述べた既習の英文の繰り返し読みが効果的である。また、語彙の知識がなければ、せっかく英語が聞き取れても正解を得られないことがあるのは、問16でも指摘した通りである。

2. 国公立二次試験

(1) 概観

まずは、2015年度の主要な国公立大学で、出題形式や内容について特筆すべきものを取り上げる。

東京大学では、記号問題については解答用紙としてマークシートが導入されたが、出題内容に直接的な影響はなかった。変更点としては、2(A)で写真を使った問題が出題され、「状況説明」と「思ったこと」という2つの事柄について書くことが求められる、という従来にない出題がされた。また、リスニング問題が例年と比べると難化した印象である。

京都大学では、読解問題で、従来の下線部和訳に加えて、指示語の内容を明示した和訳、下線部の内容説明、語形変化を伴う動詞の補充問題が出題され、英作文でも、2003年の後期試験以来の対話文の英訳問題が出題されるなど、形式面では大きな変化があったが、実質的な出題内容に大きな変化はない。

東北大学では、2014年度に出題された英語による要約問題がなくなったほか、全体の記述量が減り客観問題が増えた。しかし、ディベートを読み、どちらかの立場で自分の意見を述べる問題が出題されるなど、2014年度同様に技能統合を意識した出題が続いている。

一橋大学では、3つのテーマから1つ選んで英文を書く形式の自由英作文は例年通りだが、3つのテーマのうちの1つに絵画の説明が出された点は新傾向。

東京外国語大学では、2013年度から出題の続いているリーディング・リスニング・ライティングの技能統合を徹底追求した問題が2015年度も出題されている。

名古屋大学では、読解問題として出題された対話文を読み、その内容に関して自分の意見を書く、という技能統合を意識した問題が初めて出題された。

大阪大学は、例年通りの出題であるが、外国語学部以外の問題ではⅡから和訳問題がなくなり、下線部に対する要約に近い問題が出題された。外国語学部ではⅡの問題が例年に比べると取り組みやすい問題となつた。

神戸大学では、2014年度は設問文がすべて英語であったが、2015年度は元に戻った。英作文問題も、2014年度のグラフを用いた自由英作文2題の問題から、和文英訳と自由英作文の融合問題に戻った。

九州大学では、総語数は200語ほど減ったが、設問に絡む語彙のレベルが高くなり、全体としての難易度は上がっている。

(2) 読解問題

国公立大学の二次試験では、内容説明や和訳などの記述問題が中心となるが、二次試験で出題される英文のレベルそのものはセンター試験の第6問のレベルと大きく変わらないことが多い。和訳問題でも、従来のように複雑な構文を読み解く、という作業はそれほど必要ではなくなった。複雑な文構造の把握力が求められているというよりは、比較的平易な文の構造を正しくつかむことが求められており、合格のためにはかなりの精度で和訳できる必要がある。

そのような中、京都大学では例年通り、ほかと一線を画する和訳問題が出題されている。

I (3) ~第1文省略~ The chains of amino acids that formed silk fibers of poor quality, for example, translated into music that was aggressive and harsh, while the ones that formed better fibers

sounded softer and more fluid, as they were derived from a more interwoven network.

〈和訳例〉

たとえば、品質の低い絹糸の纖維を形成するアミノ酸の鎖は、攻撃的で耳障りな音楽に置き換えられた。その一方で、より優れた纖維を形成するアミノ酸の鎖は、より緻密に織りなされた網の目構造から生み出されたものなので、より柔らかくより流れるように聞こえたのだ。

紙面の都合上、詳しい解説は省くが、挿入された *for example* の処理、自動詞の *translate* の訳出、文脈に即した *aggressive* の訳出、明示の必要はないが *one* や *they* の指示内容の理解、*as* の訳語選択、そしてこの英文のキーワードとも言える *hierarchy* を言い換えた *network* の訳語選択など、特に京都大学に向けて練習をしてきた受験生でなければ対応できないような出題となっており、いかにも京都大学らしい問題であった。

(3) 表現力

2015 年度の自由英作文では、あるテーマについて自分の意見を述べるもの（東京大学・一橋大学・大阪大学・岡山大学・広島大学・九州大学など）、英文や日本文を読み、その内容について意見や感想を述べるもの（北海道大学・東北大学・筑波大学・名古屋大学など）、写真や図表から読み取った内容を述べるもの（東京大学・広島大学など）、対話文の一部を補充するもの（名古屋大学・金沢大学など）など、多岐に渡る。一方では、京都大学のように和文全文を英訳させる出題も続いている。また、東北大学・大阪大学・神戸大学・岡山大学・九州大学などのように、和文英訳と自由英作文の両方を出題する大学もある。

3. 私立大学

私立大学では 2015 年度も圧倒的に客観式の問題が中心であった。空所補充、下線部の言い換え、内容一致などが中心の出題形式である。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙知識がそのまま問われる場合と、文意を把握した上で、未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と、英文内容の理解力を高めておく必要があるという点では、国公立大学の場合と違ひはない。国公立・私立を問わず、近年読解問題の長

文化が進んでいるが、客観問題中心の私立大の問題は、1 題の英文量が多いだけでなく、設問数が多いのも特徴であり、限られた時間内で設間に答えるトレーニングが不可欠である。紙面の都合上、具体的な問題を挙げることはできないが、大学によっては独特な選択肢を作ることがあるので、受験大学の過去問演習が必須であるのは言うまでもない。

また、表現力を問う問題として、200 語程度の英文の要旨を 1 文で表す問題（早稲田大学 文学部・文化構想学部）、与えられたテーマについて意見を述べる問題（早稲田大学 国際教養学部・法学部・政治経済学部／慶應義塾大学 医学部・経済学部）、対話文の英訳問題（慶應義塾大学 経済学部）などが出題されている。

■江本 祐一（えもと・ゆういち）

東大、京大、医進の授業を主に担当。長文読解、京大英文解釈、京大英作文、医進英語などのテキスト、京大入試即応オープンの作成メンバー。著書に「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社）、「入試英単語の王道」（河合出版・共著）、「センターはこれだけ」（文英堂・共著）など。

新興 啓林館

URL <http://www.shinko-keirin.co.jp/>

本 社 〒543-0052 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号 TEL(06)6779-1531 FAX(06)6779-5011
東京支社 〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号 TEL(03)3814-2151 FAX(03)3814-2159
札幌支社 〒003-0005 札幌市白石区東札幌5条2丁目6番1号 TEL(011)842-8595 FAX(011)842-8594
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目4番34号双栄ビル2階 TEL(052)935-2585 FAX(052)936-4541
広島支社 〒732-0052 広島市東区光町1丁目7番11号広島CDビル5階 TEL(082)261-7246 FAX(082)261-5400
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階 TEL(092)725-6677 FAX(092)725-6680